

おかげありませう

満十五歳

このゆびと一まれ



「このゆびとーまれ」で育った私

（平成17年度心の輪を広げる体験作文
内閣府優秀賞受賞
富山県最優秀賞受賞）

富山市立藤ノ木小学校五年

岩本万由子

私は、一歳の時から「このゆびとーまれ」で育ててもらいました。あまりにも病弱で、保育所に行けなかったため、両親がいろいろなところに相談してようやくあずかってもらえたそうです。「このゆび」は、日本で初めての「富山型」といわれる、誰でもいつでも受け入れるデイサービスを実施したところです。

「このゆび」にきている人は、お年寄りも、障害のある人も、子供たちもみんな元気です。笑ったり、おしゃべりしたりととてもにぎやかで、みんなが楽しそうにしています。建物もふつうの家みたいなピンクのかわいい建物で、病院とはちがって、なにもきまりはありません。私も、いつもすきなように遊んでいました。お年寄りは、子供を見たりだっこしたりしていると元気が出てきて、優しい顔になります。子供や赤ちゃんは、たくさんの人にかわいがってもらって安心して楽しく過ごすごとができます。

私も赤ちゃんのころ、利用者のおばあさんによくだっこしてもらったり、あやしてもらっていたそうです。でも、実はそのおばあさんは重症のちほう症だったそうですが、自分ではずっと「このゆび」に働きに来ていると思っていたそうで、そのころの写真を見ても、本当にかわいがってもらったんだなあと、ありがたい気持ちでいっぱいになります。

「このゆび」にいると、障害のある人もジロジロ見られたり、かわいそうに言われてしまうこともなくて、みんな自分ができることを精一杯やって「役に立っている」自分に自信をもって、いきいきと過ごしています。

私は、障害があるから「かわいそうな人」なのではなく、「障害があってもがんばっている人」といっしょに過ごして、協力し合っていくことがお互いのために大事だと思います。小さいころの私は、目の見えないお姉さんによく遊んでもらって、いろんな曲をキーボードでひいてもらったり、手作りの手芸品をプレゼントしてもらったりしていました。それなのに、そのお姉さんに言われるまで、目が見えないことも半身不随であることもわかりませんでした。「このゆび」にきている人は、とてもいきいきしているので、どんなふうにも具合が悪い人なのかよくわからないことが多いです。これが「このゆび」のいいところだと思います。

どんどん歩き回る認知症の女の人もいます。いつも話し相手をしながら、かわるがわる職員さんがついて行って、とて

も大変そうです。少しもじつとしていなくて、職員さんが行ってもなかなか止まってくれないけど、子供が呼ぶとすぐに止まってくれます。それに、赤ちゃんや子供をあやしているときはじょうずで、ふつうの人みたいで病気には見えません。子供といるときは、顔もとてもうれしそうで、にこにこしておられます。

障害のある人にはどのぐらい具合が悪いか考えて接するかが大切だろうと考えて、なかなか積極的にかかわれない人が多いと聞きます。でも、「このゆび」のように自然にお互いの良いところを認め合って過ごすことから始めればいいのだと思います。

小さい時から、私にとって「このゆび」はじまんの場所でした。十年間かわいがって育ててもらった「このゆび」は、私にとって大切な「もう一つの家」です。まわりじゅうから丈夫に育つのだろうかと心配されていた私ですが、家族や「このゆび」のみなさんや主治医の先生方などいろいろな方のおかげで、今ではめったにかぜもひかないほどになりました。私は、秋に「このゆび」のメンバーとしてリレーマラソン大会に参加します。車いすの人たちといっしょに一人二キロずつ走ることです。大会で、力いっぱい走りたいです。

これからも「このゆび」に集まるみんなが気持ちよく過ごせるように、少しでも役に立っていききたいです。

「かわいいね、よっちゃん」

(平成17年度心の輪を広げる体験作文富山県優秀賞受賞)

富山市立藤ノ木小学校二年

野崎 由梨

「よっちゃん、アーンだよ。ゴックンしてね。アーン。」

よっちゃんは、四さいの男の子。赤ちゃんじゃないけれど、首もぐらぐらで小さな体をしているから、赤ちゃんみたいです。お母さんのおなかの中から、早く生まれてしまったんだって。日もほとんど見えなくて、光が分かるぐらいなの。ごはんは、ミキサーでドロドロのしるにしないと食べられません。赤ちゃんのスプーンで、ゆっくり口に入れてあげるよ。ほんの少しのごはんだけど、食べおわるのに一時間以上もかかるの。ちがうところに入ってしまうと、すぐはいえんになって、いのちがきけんになってしまふんだって。

学校のほうがごやお休みの日、私は「このゆびとーまれ」へお母さんといっしょに行きます。お母さんは、「このゆびとーまれ」ではたらくほいくしさん。「このゆび」のいえでは、お年よりも、赤ちゃんも、しょうがいをもつ人も、みんないっしょです。大きなかぞくみたい。

「ゆりちゃんは一人っ子だけど、このゆびにきたらみんなのおねえちゃんだね。」

と言ってもらえます。だから、よっちゃんはわたしの弟みたいにかわいいの。「ち」はつながつていないけど、心がつながつているから、かぞくなんだって。ちよっぴりうれしいような、はずかしいようなふしぎな気もち。

時どき、私はお母さんのお手つだいをします。よっちゃんにスプーンでごはんをあげたり、オムツかえのお手つだいで。よっちゃんは手や足がほうみたいに細くて、きんちようすると体が氷みたいにカチコチになってしまうの。そうなたたら、やさしく手で体をさすってあげるんだよ。よっちゃんは、わたしの顔のほうを見て、

「うーん、にやっ。」

と喋ってわらってくれます。見えないはずなのに、ちゃんとわたしの顔のほうをむくんだよ。すごいでしょ。心がつたわっているのかなあ。うれしいな。

夏休みになると、ようご学校の子どもたちがたくさん「このゆび」に通ってきます。いえの中をとび回ったり、大きなこえを出したりするから、わたしは、よっちゃんがびっくりしてなき出さないか心ばい。だって、わたしもあたまをたたかれたり、かみの毛をひっぱられる時があるからです。わざとじゃないって分かっているけど、いやな気もちになります。みんなダメなことを、つたえているよ。

一人だったらできないことでも、「このゆび」だったらだれかが手をかしてくれるから、みんな元気でいるんだね。「しよ」うがいをもっている」って、いろんな人がいるっていうことなのかなあ。わたしも、お手つだいをがんばりたいです。かわいいうちちゃんの体をいつでもなでなで、さすってあげるからね。なきかたで、あまえているのが分かるんだよ。言ばは話せないけど、なきかたや顔を見ていると、少し気もちがつたわってきます。わたしはおねえちゃんみたいなものだからね。あんしんしてね、よっちゃん。

「このゆびとーまれ」

(平成19年度小矢部市社会福祉大会福祉作文高校生最優秀賞受賞)

石動高等学校三年

大谷 奈緒

私は今年の夏、「富山型デイサービス」という形の福祉に出会った。

「ただいま」と入り、「お帰り」と迎え入れてくれる、利用者にとつて第二の家とも言うべき場所が富山県にはあった。

私が訪問した施設は、十四年も前から富山型デイサービスを始めている。大きな一軒家に「このゆびとーまれ」と書かれた小さな看板が立っていた。私が中に入ると、椅子に座り新聞を讀んでいたお年寄りが挨拶をしてくださり、子どもが別のお年寄りに絵を褒められて笑顔を見せ、女の子が手話を使って職員の方と話をしていた。これが「富山型デイサービス」である。高齢者から子ども、障害を持った方が、一緒に過ごし、同じ時間を共有している。

私に何かできることはないかと思ひ、職員の方に何をしたら良いのか尋ねると、「何もしなくていいです。」とあっさり答えられた。「ここは施設というより、家」でありたいと思っているのです、ただ利用者の方の隣にいて下さい。」

まさにノーマライゼーションの理想の姿がここにはある、と感じた。利用者と職員、高齢者と子どもと障害者の方の間に壁がなかった。おいしそうにご飯を食べる子どもを孫を見る様に見つめるお年寄り。一緒に折り紙をするボランティアの方々や障害者。彼らは二十名近くの大家族であると言えた。そこに「福祉」という言葉は感じられなかった。あるのは「笑顔」と「言葉」と「絆」であった。利用者の方が笑えば、職員の方も笑う。職員の方は利用者の方によって仕事の喜びを見つけ、利用者の方は職員の方によって生きがいを見つける。ごく自然に「相互支援」が成り立っている。

私は、ハンディキャップを持つ人も持たない人もお互いに前

を向き、生きていくためには、新しい福祉である「富山型デイサービス」は極めて有効であると考える。

「このゆびとーまれ」という呼びかけを必要としている沢山の人たちが「ただいま」と入ることができる施設が富山県はもちろん全国的に増えていくことを私は願ってやまない。

